

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0970700431		
法人名	特定非営利活動法人かけはし		
事業所名	グループホームかけはし		
所在地	栃木県日光市森友1509-61		
自己評価作成日	平成28年12月19日	評価結果市町村受理日	平成29年3月2日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189
訪問調査日	平成29年1月19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入居者1人1人の思いに添って生活の支援をしていく中で、いつでも・誰でも来やすい・居心地がよいと思ってくれる場作りを心掛けています。そして、住み慣れた家で穏やかな最期を迎えて欲しいという思いから看取りを行っています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は定員が6名と小規模であるが、かえって職員と利用者の関係が近くなり居こごちが良い。「その人らしくゆったりと安心して暮らせること」、「一人ひとりの個性を尊重し、能力を発揮できるよう支援する」ことを理念としている。建物は木造家屋を改修して使用しており、居室は家に居るような雰囲気があり落ち着く。食堂兼居間では、ゲームに興じる人、ソファでテレビを観る人、アニマルセラピーの猫を相手に遊ぶ人もいなど、それぞれが気ままに過ごしている。協力医2名が分担して月4回診察に来ており、訪問看護ステーションとも契約し、看護師が週1回健康管理を行っており、利用者の急変時には協力医と連携して24時間対応できる体制になっている。家族が希望すれば協力医・訪問看護・職員、そして家族の協力のもと看取りまで行うことができる。利用開始時には職員が利用者を伴ってご近所に挨拶に行き、回覧板を回す際にも職員が利用者と一緒に隣に行っている。お隣から野菜が届き、事業所はつくたての餅を近隣に配るなど、地域との日常的な付き合いも活発である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらい				2. 家族の2/3くらい
			3. 利用者の1/3くらい				3. 家族の1/3くらい
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらい				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらい				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらい				2. 職員の2/3くらい
			3. 利用者の1/3くらい				3. 職員の1/3くらい
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらい				2. 利用者の2/3くらい
			3. 利用者の1/3くらい				3. 利用者の1/3くらい
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらい				2. 家族等の2/3くらい
			3. 利用者の1/3くらい				3. 家族等の1/3くらい
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらい				
			3. 利用者の1/3くらい				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	【その人らしくゆったりと安心して生活出来るように】の理念を、玄関中央垂れ壁に掲示しており、職員全員で入居者1人1人の個性を尊重しながら、日々取組んでいる。	事業所開設時に職員と話し合いながら理念を作成している。「その人らしくゆったりと安心して暮らせること」を目的とし、「一人ひとりの個性を尊重し、能力を発揮できるよう支援する」としている。玄関から入ると正面に理念が掲示され、管理者が職員会議の時に折に触れて趣旨を説明するなど、職員への周知に努めている。職員は利用者一人ひとりのペースに合わせた介護に努めるなど、理念を共有し実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	徘徊のある入居者と共に回覧板を隣家に持って行ったり、自治会の盆踊りや年3回の町内清掃への参加、そして、日常的に近所宅から採れたての野菜を頂いたりしている。年末のもちつきの際には、つきたての餅を近隣・組内に届けている。	ご近所から畑の取れたての野菜が届いたり、新しい利用者が入ると近所に挨拶に行ったり、回覧板を回す際にも徘徊のある利用者と一緒に顔を見てもらうなど、地域との日常的な交流がある。年末の事業所の餅つきは、以前はご近所の人に参加していたが、高齢化に伴い参加できなくなり、現在はつきたての餅を隣所に届けている。そば打ちのボランティアが来てそばをふるまってくれたり、保育園児が来訪して人形劇を披露するなどの地域との交流もある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所主催のイベントへの呼びかけをし、実際に入居者とふれあってもらい、その際の職員の支援方法をみてもらっている。また電話相談には随時応じている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	隔月開催時、入居者の健康状態や現状、行事内容等を詳しく報告し、市職員・民生委員・家族等からの意見や助言をケアに活かせるよう努めている。	年6回隔月に運営推進会議を開催している。会議の構成メンバーは、利用者家族、民生委員および市担当課職員で、地域包括支援センター職員は、都合が付く範囲で出席している。会議では、利用者の健康状態や徘徊などの状況、行事予定や実施状況などの報告があり、その後意見交換を行っている。日光市独自の徘徊者に付けるシールが紹介され、事業所でも利用するようにするなど、意見や助言が運営に反映されている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	何かがおこらないと連絡を密にする事はないが、隔月の推進会議に出席してもらう中で取組み方を報告する事が出来るので、助言ももらう事が出来る。又、年1度の市有バスを利用しての日帰り旅行には、介護サービス係の同行が必ずある。	運営推進会議に市担当課職員が参加しており、情報提供や意見交換が行われている。県内各地に行き、陶芸体験や動物との触れ合いなどを体験している日帰り旅行には、市のバスを利用している。この旅行には、利用者及び家族に加えて市担当課職員も参加しており、旅行を通じて市担当職員が利用者の状況をよく知る機会となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員1人1人が見守り・目配りを常に心掛けており、日中は玄関施錠は行っていない。だが入居者の不穏が続く場合には、落ち着くまで玄関チェーンのみかける時やセンサーを使用する時もある。	徘徊傾向がある利用者については、職員の見守りに対応しており、職員が手薄になるなどやむを得ない一時的な場合のみ玄関にチェーンやセンサーを付けて対応することがあるが、日中は玄関の施錠は行っていない。ベッドから転落する危険性がある場合でも、ベッド柵は設けずに対応するようにしており、利用者一人ひとりの状況について職員が話し合い身体拘束しないケアに努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員会議にて、“身体拘束をしないケア”の勉強会を行っている。そして、言葉遣いには常に気をつけ、心身両面からの虐待がないように努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今年度においては研修の機会をもつ事が出来なかった。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時にわかりやすい言葉で説明し、疑問や不安に思っている事に対して解消出来るよう努めている。又、改定があった時には毎月郵送している文書でわかりやすく知らせている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族来所時には話し易い環境を作り、気軽に希望や質問が出来るよう心掛けている。そして、入居者が自己決定出来るような質問の仕方や声掛けに努め、それらを日々に反映している。	家族の来所時には、職員から話しかけて利用者の状況などを説明するなど、気軽に話しやすい雰囲気を作るように努めている。家族からは、出来るだけ歩かせてほしいとか、こまめに髭を剃ってほしいなど、日常生活に関する要望が多い。自分から申し出る利用者は少ないが、飲物や刺身が食べたいなど飲食に関する要望が出ることもある。誕生会には、好きな物や食べたい物を提供するようにしており、希望を聞きとるか、それが無理な場合には生活歴等から判断して好みのものを用意するようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常業務時や職員会議の中で、職員からの提案や意見を聞くようにしており、それをその場限りの話だけで終わらせないで、実践にもっていくように努めている。	職員からの提案や意見は、職員会議や日常業務の中で聞きとるようにしており、職員にとっては意見を言いやすい環境にある。職員からの提案で玄関にセンサーを付けたり、利用者個々のオムツパッドを適正なサイズのものに替えるなど職員の意見が実践に反映されている。職員会議では、2ヶ月毎のモニタリングも行われており、その場が出た職員からの意見が介護計画に反映されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	就業規則の改正時には書類を渡して直接説明をしている。又、勤務態度や実績・資格などを考慮し、よりよい雰囲気の中で仕事ができるような環境整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修への積極的参加を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	日光市サービス連絡協議会や県グループホーム協会及び日光小規模部会の研修や勉強会に参加し、交流をもちながら質向上に取り組んでいる。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	新入居者には、安心して生活してもらえるよう、環境が変わる事への不安を取りのぞけるよう心掛けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の見学及び面接においては、本人だけではなく家族の不安が少しでも減るよう、要望に耳を傾けるように必ずしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	今、もっとも必要としている支援は何かを見極め、全職員で対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は尊敬の念をもって共に生活をしていく姿勢をもちながら、入居者が自己決定ができるような声掛けの工夫をし、1人1人が出来る事は行ってもらい、出来ない事への支援をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	内科以外の通院の協力、イベントへの積極的な参加を促したり、家族への電話連絡を行う事で、入居者の現状を常にわかってもらえるような働き掛けを持っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	どの時間帯でも、面会時にはゆっくりと過ごせる場と雰囲気配慮し、いつでも遠慮なく誰でもが来てもらえるようにしている。	以前は友人や知人が来訪していたが、現在ではほとんどの利用者が家族と親戚の来訪だけになっている。正月に帰宅する利用者も以前は何人かいたが、今年は一人だけになってしまった。組内の寄り合いに家族が連れて行く人もいるが、ほとんどの人は家族や親戚、事業所とその近隣との繋がりのみになってきており、高齢化・重度化に伴い馴染みの人や場との関係は薄れてきている。	高齢化・重度化に伴い、馴染みの人や場との関係が薄れてきているが、事業所近隣との関係を持つなど、可能な限り事業所以外の場との関係を持てるよう引き続き努力してほしい。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係は、とても良好である。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	今も退所家族が、行事のボランティアに来てくれたり、季節の果物を届けてくれている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	生活のさまざまな場面(食事・入浴・外出等)において、本人の自己決定を尊重し、実践している。	高齢化・重度化に伴い利用者の思いや意向を把握しづらくなってきている。入居時に本人や家族から聞きとった情報、利用者と職員の長い付き合いの中から分かったことなどを参考に、食事・入浴・外出などにおいて、利用者一人ひとりの希望に添えるよう支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に、本人及び家族やケアマネジャーから情報を得ると共に、前利用サービス事業所からの情報も得ている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	1人1人の生活パターン・健康状態、得意不得意な事等の把握はしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	2ヶ月毎のケア会議でモニタリングを行い、現状の確認をし、それに即した介護計画の作成をしている。	職員全員が参加して2ヶ月毎にケア会議を開きモニタリングを行っており、現状の確認、課題の見直しや新たな提案などが話し合われている。家族からは来訪時等に意見・要望を聞きとっている。これらの意見・要望に添ってケアマネージャーが介護計画を作成している。ケアマネージャーは、入居時に聞きとった「やりたいこと、やれること」など、利用者一人ひとりの希望に添えるような計画作りを目指している。なお、看取りを行うにあたっては、医師・家族・職員を交えた担当者会議も開いている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録を共有する事で、今後の介護計画・ケアに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	柔軟なサービス・1人1人に添ったサービスが出来るように取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	1人1人がグループホームで安心して生活していけるよう、近隣とのおつきあいを大切にしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医の専門外(眼科・耳鼻科・整形外科等)は、家族通院をお願いしている。	2名の協力医が分担して月4回事業所に診察に来ることから、本人・家族の了解のもとで入居者全員が協力医をかかりつけ医としている。主治医の専門外の眼科、耳鼻咽喉科、整形外科等専門医には、家族の介助で通院している。訪問看護ステーションとも契約し、看護師が週1回来所しバイタルチェックや便秘対策などの健康管理を行っており、利用者の急変時には協力医と連携して24時間対応できる体制が作られている。職員は協力医や看護師が記入する、専用ノートや日誌で情報を共有している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	24時間の医療連携をしているので、急変時にも対応出来る体制である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、病院との連絡・連携を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人と家族の意向を尊重し、医師と事業所も交えて、終末期にむけての方針を決定している。	本人と家族の希望があれば、家族の協力のもと、24時間体制の訪問看護ステーションと協力医の医療連携により、看取りを行うことにしている。職員から「家族の協力があれば看取ってあげたい」との声が出てきたため、事業所として看取りを行う方針を決定した。現在2名の看取り希望者がおり、家族・職員・医療関係者と連携を取りながら取り組んで行くとしている。また、新入職員に対しては、事業所の方針を説明し、話し合いと研修を通じて不安を少なくして進めたいと考えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	2年毎に普通救命講習を受講している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	全職員が避難方法を身につける事は出来ていない。又、地域との協力体制も築けていない。そして、避難訓練は年4回実施しているが、水害については行った事が無い。	年に4回避難訓練を行っており、避難訓練計画書を作成し、実施後には課題を整理し報告書も作成している。昼間や夜間想定で行ったり出火場所を変えるなど、課題を見つけ出す工夫もしている。スプリンクラーが設置され、非常口には非常用持ち出しバッグも常備されている。地域住民へは文書で訓練への参加を依頼しているが、限られた人のみでなかなか広がらない。まずは交流を深めてからと、参加者を増やす努力をしている。	避難訓練に近隣住民も参加しているが、限られた人のみとなっている。今後は、消防団への再度の働きかけなど、避難訓練への参加者が広がっていくよう引き続き努力してほしい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	随時、心掛けている。	職員は利用者に対し「〇〇さん」と優しく呼びかけから話し始めるようにするなど、一人ひとりの人格を尊重した支援に努めている。管理者は、言葉づかいに関して会議の場など折に触れて話しており、不適切な言葉かけに気が付いたときはその都度注意している。個人情報に関しても、人前でも会話のきっかけにできる程度のもので、人には知られたくない・知らせたくない内容のものはきちんと区分けして対応しており、内容によっては聞く場所や内容を変えるなどプライバシーには常に気をつけている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	常に“開かれた質問”の技法を心掛け、自己決定が出来るようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	希望に添えるように心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	洋服を自分で選べる現入居者は2名だが、他入居者には職員が支援をして、その日の洋服を揃えている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食べたい物、飲みたい物を食事内容に活かしている。食材を切ったり、食器拭きや食器片付け・米研ぎ等は出来る入居者に行ってもらっている。	利用者と共に近くのスーパーで購入した食材や、宅配生協で届いた食材などストックしている物を活かして、前の食事と同じ内容にならない様に工夫しながら、職員がその日の献立を決めている。利用者の希望を取入れたり、近所から頂く野菜を使ったりすることもある。手伝いの出来る利用者と共に、職員が毎食調理を行い、同じ食卓で同じ食事を楽しんでいる。一般家庭と同じ調理法や味付けは好評で、残す利用者はほとんどいない。食後のお茶は一部の利用者が職員の手助けで用意している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	糖尿病や高血圧の方には低カロリー of 食事の工夫をするなど、1人1人に応じた支援をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	義歯は洗浄剤につけ、口腔ケアを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンを把握したトイレ誘導を行い、1人1人に応じた声掛け・見守り・介助を行っている。	排泄チェック表を参考にして、各自の排泄パターンを把握し、その人に合わせた定時誘導・声掛けを行っている。夜間はベット脇に下げた鈴を鳴らす本人からの合図によって支援を行っている。トイレへの声掛けは、トイレを排泄場所と認識してもらうために、あえて「トイレに行きましょう」と直接的な言葉を使用しているが、小さな声でさりげなく行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日の発酵食品の摂取や、医師や訪問看護師から、水分量や下剤服薬量・服薬時間等の助言をもらいながら、便秘解消につなげている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的な入浴日は決まっているが、夏場のシャワー浴や本人の希望によるの実施もしている。	2日に1回午前中に入浴が基本だが、利用者の希望や状態により、合間にシャワー浴や足浴を追加することもある。家庭的な浴室は浅めの浴槽で跨ぎ易く、脱衣所・浴室内と動線に沿って手すりを取り付けられていて、職員が見守りながら、利用者のペースでゆっくりと入浴できるようになっている。好みのシャンプーやリンスを持ち込み使用する利用者もいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	安心して休んでもらえるよう、不安の訴えがあった時には傾聴し、眠剤を服用する事で良眠出来る入居者もいる。夜間の室内温度調節をし、冬は湯たんぽを使用している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤名と効用・副作用の理解に努め、服薬支援と配薬ミス防止の為、3重チェックを行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	歌やスポーツ鑑賞等、1人1人の好きな事が入居後も継続出来るよう支援をし、楽しい時間をもてるようにしている。又、ボランティアの定期的な協力もある。そして、洗濯物干し・たたみは皆で協力して行ってくれている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	買物には日常的に出掛けている。ドライブや外出の行事計画を毎月しているが、入居者の体調や天候により実施出来ない時もある。毎週家族と共に外出する入居者もいる。	利用者の高齢化・重度化に伴い、近所を散歩する回数も少なくなり、スーパーへの買い物外出や回覧板を届けたりする人も限られている。年1回、市のバスを借りて出かける県内の日帰り旅行は、職員・利用者・家族の他、市の担当職員の参加もあり、体験旅行を目的とした楽しいものになっている。また、季節ごとの花見や紅葉狩りのドライブは、季節を感じる手助けとなり、家族と共に定期的に美容室に出かける利用者もいる。	利用者の高齢化・重度化に伴い以前より日常的な散歩や外出の機会が減ってきていると思われる。日常的な近隣散歩、季節を感じる外出、利用者を外に連れ出してもらいような家族への働きかけなど、可能な限り外出する機会を増やすよう努力することを期待する。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を自室で所持している入居者はいないが、外出時に持たせて欲しいとの家族からの希望で、1名だけ、事業所でお金を保管している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	1名だけ、携帯で家族とやりとりをしている。使い方がわからなくなってしまった時には支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂はソファーを対面にし、テレビを見たり談笑したり、お茶を飲んだり、時にうたた寝をして過ごしている。全面ガラス戸で日当たりがよく、そこから外の景色がよく見え、四季の移り変わりを感じる事が出来る。	木造の食堂兼居間は、南向きの大きな窓から陽光がたっぷり入り明るい。大きめのテーブルでゲームに興じている人や協のキッチンで料理を手伝う人、対面に置かれたソファでテレビを観る人、長年飼っているアニマルセラピーの役目をしている猫を相手に遊ぶ人など、各自が気ままに過ごし、事業所理念である「その人らしくゆったりと安心して暮らせること」を実践する空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファーとテーブルが設置してあるので、好きな場所で過ごす事が出来る。気の合う入居者同士がソファーに隣同士で座って談笑している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	在宅時に使い慣れた布団を使用したり、位牌を置いたり、製作品を飾っている。	木造家屋を改修した建物のため、利用者の居室は一般家庭の部屋と同じ雰囲気があり、自宅との環境ギャップが少なく安心感を与えている。エアコン・カーテン・ベッドは備え付けられているが、使い慣れたタンスや鏡台を持ち込み自分の部屋を作り上げている。位牌が置かれた部屋や、日中は押入れに布団が片付けられすっきりとした部屋など、住む人の生活が感じられる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	1人1人の今持っている能力を活かす事が出来るよう、“できない事”“わからない事”を職員で共通理解し、支援をしながら生活を継続出来るようにしている。		